

妖怪名義小考

文学研究の手法として、ひとつの作品を定めて分析する以外に、言葉にこだわり、その意味内容について用例、文脈をふまえて検証するという方法がある。特に本稿であつかう「妖怪」「怪異」にまつわる語彙は、その実態がとらえられず、個人の感情（恐怖、嫌悪、驚き、好奇心、あるいは笑いなど）に関わること、もの、である場合が多く、客観的な定義が困難であるゆえに、ついに文脈をふまえた言葉（表現）としてとらえるしかない。

本稿においては現在の研究者が「妖怪」「怪異」にまつわる語彙として認識するいくつかの言葉を手がかりに、その表現史について簡単な調査記録を述べる。それぞれの語彙が現在の研究者がとらえるのと同じ認識で「妖怪」「怪異」に関わるのか、または歴史的、社会的な背景により変化があるのか。用例をふまえ、見通しを述べたい。

久留島 元

なお「妖怪」について、小松和彦氏はその中身を、

- ① 出来事（現象）としての妖怪（妖怪・現象）
 - ② 存在としての妖怪（妖怪・存在）
 - ③ 造形としての妖怪（妖怪・造形）
- の三つの領域に分けて考えることができる、という。^①「妖怪」という言葉は、日本では『続日本紀』宝亀八年（七七七）三月の記事が初見となる。

辛未。大赦。為宮中頗有妖怪也。^②

ここにあるように「妖怪」は「妖しい怪」であり、「怪異」「物怪（あるいは「ものごとし）」と同じように、きざしとしてあらわれる異例な現象をさす語彙であった。^③しかし京極夏彦氏、香川雅信氏らの一連の研究によれば、近代以降「妖怪」は井上円了による「妖怪学」の言挙げによって広まり、円了自身の用法を超えて、怪

異現象ではなく、現象を引きおこす存在、化物に近い語彙として周知された^④。香川氏の簡潔なまとめを引く。

先に述べたように、田了のいう「妖怪」は現在の「妖怪」とは異なる意味あい概念であったが、当時の人々は、それを江戸時代の「化物」に替わる最新の語彙として受け入れた。「妖怪」が「超自然的な存在」を指す名称となっていたのは、実はこの時だったのである^⑤。

一方、小松氏は近世における黄表紙における表記について私がつとも興味深く思ったのは、われわれが「妖怪」と表現するモノたちを、「化物」「天怪」「妖怪」などといった多様な表記をしつつも、いずれも「ばけもの」と読ませていることである。江戸時代の人々の間では「化物」という呼び方が一般的であったということ^⑥を物語っている。

と述べる。また京極氏によれば、土居浩氏が元禄二年（二六八九）刊行の『京羽二重織留』の分類を調査し、神仏の靈験を「奇瑞」、神仏とかかわらない説明不能なできごとを「妖怪」に振り分けている、と指摘している^⑦。これらの成果をふまえ京極氏は、「妖怪」という言葉は化物を指す、やや硬質な語彙として用意されたものの、それほど使われることがなく、近代以降にメジャーになった、と結論する。

こうした見取り図はおおまかに正しいであろうが、近世期の用例についてはなお精査を要するだろう。事例の補強にしかならぬが、宝永元年から三年（一七〇四〜〇六）に刊行された真言僧蓮体編の勸化本『観音冥応集』を掲げておく。

二夜三日ノ間、十一面ノ護摩ヲ修セラレケレバ、十日バカリモ妖怪去テ静ナリシガ、又或夜ヨリ初ノ如クニナリス。加持スレバ即止ム。又暫クアツテハ初ノ如ク来リケル程ニ、十一面観音ノ真言、百遍梵書シテ、是ヲ以テ窓ヲ張塞ギケレバ、其ヨリ永ク妖怪来ラズ。^⑧

卷四、第七話「女ノ嫉妬故ニ崇リヲ作ス真言ヲ誦シテ攘除ク事」の例である。延宝六年のころ摂州河辺郡安倉村で、事情あつて妻と別れた男が後妻を迎えたところ、先妻が夜な夜な後妻のもとに現れるといい、夫の目には見えないが人の出入りできない窓から侵入するといので中山寺の秀鏡に加持を依頼するという内容である。先妻は「物怪」「妖鬼」とも呼ばれ、「妖怪」には「ヤウクワイ」「バケモノ」の二種のルビが宛てられている。ここでは、本来凶兆をあらわす語彙であった「物怪」「妖怪」がともに「超自然的な存在を指す名称」に変化している様相がみえる。

また同じく卷四第十二話は「猫神ノ妖怪并ニ野干ノ事」である。備中岡山に猫神社という小社があつたが、鳩を飼う武士が猫神に鳩

を食われて怒り、これを打ち殺して河に流したため、猫神の「怨霊」が町人に取り憑き悩ませた。猫神の屍を探して埋め、また例の武士が社を改めて破壊してしまったので、その後は何事もなかったという。ルビは「ヤウクワイ」である。いずれも近世中期の例として注目できるだろう。

「うしをに」——枕草子から太平記へ——

三巻本『枕草子』一四七段は「名おそろしきもの」を列举する、物尽くしの章段である。

名おそろしきもの 青淵。谷のほら。鱧板。くろがね。つちくれ。いかづちは名のみならず、いみじうおそろし。はやち。ふさう雲。ほこ星。肘笠雨。荒野ら。強盜。またよろづにおそろし。らんそう、おほかたおそろし。かなもち。いきすだま。くちなはいちご。鬼わらび。鬼ところ。むばら。からたけ。いりすみ。牛鬼。礎。名よりも見るはをそろし。^⑨

当該の章段は能因本では一五七段にあたり、「ほこ星」のあと「狼。牛はさめ。らう。ろうの長。いにすし。それも名こそは、見るおそろし。縄むしろ」のほか「牡丹」が加わり、「かなもち」がない。その他、諸本により「からたけ」を「からたち（積殻）」としたり、「いりすみ」を「いかすみ」としたり、「なはしろ」「つの

むし」「あらた人たま」「さる丸」などが加わる本文もあり、現在では不詳とされる語も多い。^⑩

ここで注目したいのは「牛鬼」についてである。諸本いずれも末尾近くにあげられており、松尾聡、永井和子校注『新編日本古典文学全集』では旧全集のまま変更がなく「不審。一説、伝説にいう海や淵に住む鬼。また一説、地獄の牛頭馬頭の利鬼」とする。諸注では北村季吟『枕草子春曙抄』以来「牛頭馬頭のたぐひ也」とするものがほとんどである。いくつかあげると

金子元臣校注『枕草子評釈』^⑫

仏教における牛頭馬頭の利鬼をいふ。

田中重太郎校注『枕冊子全注釈』三^⑬

地獄閻魔の庁にいる獄卒。牛頭・馬頭という鬼。

池田亀鑑・岸上慎二校注『日本古典文学大系 枕草子』^⑭

地獄閻魔の庁にいる獄卒で牛頭馬頭の鬼をさすかという。

萩谷朴校注『新潮日本古典集成 枕草子』下^⑮

地獄変の屏風などに描かれた牛頭の獄卒か。

萩谷朴『枕草子解環』三^⑯

地獄変の屏風などに描かれた牛頭の獄卒か。

石田穰二訳注『枕草子』^⑰

伝説に言う、海または淵の怪。牛頭人身の地獄の鬼ではあるま

い。

渡辺実校注『枕草子』¹⁸⁾

牛頭のことかと言おう。「牛」「鬼」共に恐ろしい。

石田穰二は強力に「牛頭」説を否定しており、確かに管見の限り地獄の牛頭を「牛鬼」とする明確な用例は、十返舎一九『東海道中膝栗毛』三編にまで下る。弥次郎の亡母を神おろした巫女が「肴は骨までくやつたむくひ、今は牛鬼になつて、地獄の門番をしてゐらるるゆへ」と語る程度である。

また、しばしば参照される『今昔物語集』巻十七「於但馬国古寺毘沙門、伏牛頭鬼助僧語第四二」では「牛ノ頭ナル鬼」に襲われた沙門が、法華経を誦した加護により毘沙門に助けられたと語る。ただし『今昔物語集』原文に「牛鬼」の表記はなく、享保年間（一七一六―一七三六）に刊行された井澤蟠龍長秀『考訂今昔物語』二六に、同話を「七 毘沙門天伏牛鬼助僧語」として抄出する。²¹⁾ 本文でも朝になると「かたはらに牛鬼たをれて死居り」という表現があり、季吟『春曙抄』からは五十年ほどあとの例だが、「牛頭鬼」を牛鬼とする理解は共有されていよう。

このように地獄の牛頭を「牛鬼」と理解する例は近世に多く、清少納言と同時代にあったかわからない。一方、「海または淵の怪」として語られる「牛鬼」も、各地の民俗事例として伝わっているも

の、古い用例は見いだせない。

中世にさかのぼる「牛鬼」の用例は、『太平記』巻三二「鬼丸鬼切の事」にある。渡辺綱が鬼の右手を切り落として主頼光に献上したところ、鬼が頼光の老母に化けて手を取り戻しに来るという故事の場面である。

「これは我が手にて候ふ」とて、切株に差し合わせて、忽ちに長二丈ばかりなる牛鬼に成りて、酌に立ちたる綱を左の手に提げて、天井の煙出より上がりけるを、頼光件の太刀を抜き、牛鬼の頸を懸けず切つて落す。²²⁾

また、『太平記』本文からの影響が指摘される『俵藤太物語』にも

二三千のたいまつと見えしは、足にてやあるらん。頭は牛鬼のごとくにて、そのかたち大なることたとへんかたもなし。²³⁾

との表現が見られる。校注では獄卒の牛頭が想定されているが、確定はできない。むしろ（牛のように）「巨大な鬼」といった表現であろう。つまり「牛鬼」は『枕草子』を弧例として『太平記』まで用例が見いだせず、『太平記』に至っても獄卒としての牛頭に特定できない語彙なのである。

ここで『枕草子』本文に立ち返ってみよう。章段末尾の「名よりも見るはをそろし」の一文に「碓」だけでなく「牛鬼」をふくむと

すれば、清少納言は「牛鬼」を造形とともに認識し、名前以上に具体的な外形を恐れていたことになる。地獄絵などの受容が考えらう。しかし能因本、前田本、堺本ではこの一文がない。すなわち「牛鬼」を他のものと同じく「名前が（実物よりも）恐ろしいもの」と認識する。

地獄絵については、他ならぬ『枕草子』七七段「御仏名のまたの日」に、地獄絵の屏風絵を中宮定子から「これ見よ」と言われた清少納言が怖れて逃げ隠れたというエピソードも知られる。²⁶それをふまえれば地獄絵の獄卒を名前が恐ろしいものに数えるのは、やや違和感がある。三巻本以外の本文を誤写と判断し「名よりも見るはをそろし」きものと数えるか、あるいは「牛鬼」を獄卒ではないものと考えるか、いずれかであろう。

すなわち、少なくとも三巻本以外の、能因本、前田本、堺本の本文に拠るかぎりでは、「牛鬼」を名前ばかりで実態が恐ろしくない、地獄絵の獄卒のような具体的造形をとまわらないものとする理解があったことを示す。これをふまえて『太平記』に至れば、実態のわからない名のみを恐ろしいものとして「牛鬼」の名が伝承されていた可能性が、あるのではないか。

牛鬼をめぐる伝承

ここであえて「海や淵の怪」ではない牛鬼伝承をとりあげてみたい。

鳥取県日野郡日南町大倉山は、孝靈天皇が牛鬼を退治し大蔵大明神をまつた、という。あるいは宝曆十三年（一七六三）の長谷部家文書「当日野郡人久不住事」では、大倉山は牛鬼山と呼ばれていたが、長谷部元信という人物が山上の鬼神から米俵を投げつけられ、これを受けたので鬼は姿を消した、さらに元信が神社を建立すると鬼は二度と現れなかった、という。²⁷

天保十年（一八三九）成立の『紀伊統風土記』巻八八には、牟婁郡尾呂志莊片川村東、栗栖村との往還道にある堂野碑は天正三年（一五七五）に新蔵という者が建てたもので、以来牛鬼が出没しなくなったと記す。²⁸石碑の銘は以下のとおりである。

現世安穩後生菩提處也

南無阿彌陀佛 惡魔退治所

天正三稔己亥芒種吉日 白 新蔵作

また、元文五年（一七四〇）成立の村井古道『南都年中行事』によれば、若草山の山焼きの縁起として「牛鬼といふ妖怪」に関する説話が伝えられる。

早春此山を焼ざる時は牛鬼といふ妖怪出といふ。依之正月丑の日を用ひて放火すといへども、近年日を撰まず雨天残雪を除き元日より三日過ぎ放火す。²⁹

これらに先立ち、万治年間（一六五八―六〇）刊行の『東海道名所記』一には「浅草にハ、観音おはします。きせんくんじゆして、あゆミをはこぶ。昔、此所より、牛鬼が出て、かけまはりけりといふ。」³⁰とあり、『丙辰紀行』にも「爰に寺あり、たふとき観音ましますとて、人の多く参詣すと申ければ、……むかし此所より牛鬼の出て。走りありきし事を、心に不図おもひ出て。馬こそ大士の化現なれ。何とて牛は出けるぞと。」³¹云々と見える。浅草寺周辺に、牛鬼があらわれたという伝承があったのである。

さかのぼると『吾妻鏡』建長三年三月六日条に、

丙寅。武蔵国浅草寺、如牛者忽然出現、奔走于寺、于時寺僧五十口計食堂之間集会也、見件之怪異、廿四人立所受病痾、起居進退不成、居風云々、七人即座死云々³²

とあるが、ここでは「牛の如き者」とある。ところが元禄期刊行かと疑われる古浄瑠璃『丑御前の本地』では、浅草牛御前社の本地を源頼光の弟「丑御前」とであると語る。

丑御前は北野天神の転生で、母の胎内にやどること三年三月、天慶四年辛丑、三月二十五日丑の日、丑の刻に髪や齒の生えそろうた

鬼神のような容貌で生まれ、乳母すさきとともに山に捨てられるが、関東で蜂起して坂田金時らに討ち滅ぼされ、最後に十丈の牛の姿で暴れ狂い、ついに「あら人神」としてまつられたという。³³なお貞享四年（一六八二）刊行の『故郷婦の江戸咄』では、牛嶋丑御前社は建長年間浅草川から現れた牛鬼が人民を悩ませ、観音堂に入つて行方知らずとなつたが、これを一社の神としていわい氏神とした、と語るといふ。³⁴さらに化政期（一八〇四―二九）成立の地誌『新編武蔵風土記稿』巻二「葛飾郡之二」では、「牛御前社」の由来として次のように記される。

本所及牛嶋ノ鎮守ナリ、此本所表町最勝寺持祭神素戔嗚尊ハ東帶座像ノ画幅ナリ。…縁起アリ。信シカタキコト多シ…老翁ハ素戔嗚尊ノ権化ナリ。牛頭ヲ戴テ守護シ賜ハントノ誓ニマカセテ牛御前ト号シ、弟子良本ヲ留メテコノ像ヲ守ラシメ、本地大日ノ像ヲ作り釈迦ノ石像ヲ彫刻シ、コレヲ留メ大師ハ登山セリ。…又建長年中浅草川ヨリ牛鬼ノ如キ異形ノモノ飛出シ、嶼中ヲ走セメクリ当社ニ飛入忽然トシテ行方ヲ知ラス。時ニ社壇ニ一ツノ玉ヲ落セリ。今社宝牛玉是ナリト記シタレト、旧キコトナレハ謎ナラサルコト多シ。³⁵

牛頭の素戔嗚尊を祀る牛嶋神社（牛御前社）の縁起に『吾妻鏡』の怪異を結びつけ、「牛鬼」出現を語る。このように近世期を通じて

て浅草川から出現した「牛鬼」を寺社縁起と結ぶ説があった。

いずれも『太平記』流布後だが、頼光との関連ははやく失われ、牛頭とも無関係な「牛鬼」伝承が各地に寺社縁起として定着していたのである。浅草川との関連も注目されるが、なにより「牛」「鬼」双方から想像される「恐ろしいもの」という、不確かな実態のない語彙だったからこそ、このような広がりを生んだのではないか。

なお「牛鬼」について、先行研究では神功皇后伝説との関連を重視するものもある。新羅へ出征する神功皇后の船を襲った牛を住吉神が投げ倒したため牛軋びから牛窓になったという岡山県の地名由来につながる伝承である。はやく今川了俊『鹿苑院殿嚴島参詣記』などに見え、羅山『本朝神社考』では牛は「塵輪」という鬼の化けたものとされる。この伝承は瀬戸内地方に多く牛鬼伝説が伝わることに関わり、牛と水辺にまつわる信仰や、四国地方の風流祭礼との関連など複雑な問題が残されるが、全てに答える用意はない。後考を待ちたい。

「付喪神」の成立——伊勢物語古注の世界——

器物の妖怪に関する総称として一般に知られているのが「付喪神」である。「付喪神」の説明には室町物語『付喪神記』（『付喪神絵巻』）の冒頭部分が引用されることが多い。

陰陽雜記云、器物百年を経て化して精霊を得てより、人の心を誑す。これを付喪神と号すといへり。是によりて世俗毎年立春にさきだちて、人家のふる具足（具）を払いだして路次（路）にすつる事侍り、これを煤（煤）払といふ。これ則ち百年に一年たらぬ付喪神の災難にあはじとなり。^⑧

「陰陽雜記」という書物によれば器物百年を経ると精霊を得る、これを「付喪神」という。このため一般に、立春の前になると古い道具を路次に捨てる、煤払ということが行われる。これは百年に一年足らぬ付喪神の難にあわなしたためだ、という。

周知のとおり「百年に一年たらぬ付喪神」という言い回しは、『伊勢物語』六三段の歌をふまえる。年を経ても色好みの心を忘れない老女が、息子が頼んで招いたとも知らず在原業平の再訪を信じ、様子（百）をうかがいに来たことに気づいて業平の詠んだ歌である。

も、とせ（百）にひと、せたらぬ（一）つくもがみ 我をこふらし（百）おもかけ（影）
に見ゆ

すでに田中貴子氏による周到な研究があり、『冷泉家流伊勢物語抄』に次のような妖怪化した「付喪神」の説明があることが知られる。

つくもがみとは、百鬼夜行の事也。陰陽記云、狸（狸）狐（狐）狼（狼）之類、満百年致人怪喪、故名（つ）属喪神（た）といへり。是はりとう（類）ころうとう（類）

のけだ物、百年いきぬれば色々のへんげと成て人にわづらひをあたふ。是は必夜ありきてへんげをなすゆへに、夜行神ともいふなり。九十九といふ年より変化そむる也。⁴⁰

付喪神（属喪神）とは「百鬼夜行」のことで、狐狸など動物も百年生されば人にわざわいをなし、夜行して変化するから「夜行神」ともいうのだという。これに続いて、老女は九九歳ではないが業平を悩ませたので「付喪神」といったのだ、という説明がある。物語は業平の博愛的な精神を（半ば呆れながらも）肯定した章段であったはずだが、これらの注釈は老女を「年経て人を悩ます」厄介な化け物、として理解する。

これは特異な解釈ではなかったらしく、『増纂伊勢物語抄』、『十卷本伊勢物語注』など同種の注釈をあげるものは多い。ここにある「陰陽記」という書名も権威づけのため引用された「いいかげんなデッチアゲ」というのが定説で、『付喪神記』の引く「陰陽雑記」は伊勢物語注の影響を示す残滓と考えられる。

では、器物と「つくもがみ」とのつながりはどこから生まれたのか。さらに伊勢物語古注釈の世界を探ってみると、『伊勢物語奥秘書』に、

人の家具は何にてもあれ、年をふれば、変化して、人を悩ますなり。されとも、百年にたらねは、人に見あらわされて、人をた

ぶらかす事、思ふやうにならず。是を、つくも神と云也。⁴²

とある。さらに荒木浩氏は宮中の「作物所」に着目する。「作物所」は「竹取物語」などにも登場する宮中の細工物を造り出す場であるが、諸本によって「くもんつかさ」などと書かれるように、中世には「つくも」と「作物」との対応関係は、はやくより透明さを失って、民間語源が発生しやすい言語環境にあったという。

西山克氏は「私は『絵巻』の付喪神を、平安時代前期に成立する宮中の作物所（つくもところ）を前提に、「作物（つくも）」にかけた室町知識人の創作と考えている」と端的にまとめ、古辞書を中心に「作物所」が知られていたことを明らかにしている。⁴⁴

実は『伊勢物語集注』六にも「九禪抄云、作物所とてあり。物を作る所也。細工に物を作りつらねたるやうなる髪と也」⁴⁵とある。やはり「つくもがみ」を「作物」と掛けて理解することは、一定の知識があれば周知だったのだろう。そこに業平を悩ませる伊勢物語の老女が重ねられ、言語遊戯的に成立したのが「付喪神」であった、と考えてよい。

付喪神の背景

ここで気になるのは、「付喪神」と名づけられていない器物の妖怪に関する点である。よく知られるとおり、室町物語『付喪神記』に

先行して、『不動利益縁起』（『泣不動縁起』）、「土蜘蛛草紙」、『融通念仏縁起』など、十四世紀成立かといわれる絵巻群に、鉄輪や角盥など器物を基調とした異形が描かれる。¹⁶

複数の絵巻に同工の異形が描かれることは図様の流通としても注目すべき事例だが、器物由来の異形が入りまじる発想は、どのように形成されたのだろうか。言語遊戯的に成立したと思われる「付喪神」とは、どこで交わるのだろうか。

かつて小松和彦氏は、付喪神を中世的「妖怪」と呼んだ。¹⁷小松氏は『今昔物語集』にあらわれる「古代的な妖怪」と比較して古代と中世の「妖怪観の相違」を見だし、中世に職人層の台頭したことが影響し付喪神が成立したと推論したのである。

つまり、古代的な妖怪は、不可視的な霊が事物に変じたり、示現したりするという形でその存在を示すのに対し、中世的な妖怪は、可視的な事物が霊的なものを獲得したり、それに内在する精霊が異様なものに変じたりして、その存在を語り示そうとするからである。

別の言い方をすれば、妖怪観が逆転しているのである。¹⁸

小松氏のあげる『今昔』巻二七「東三条銅精成人形被掘出語第六」は、東三条殿の屋敷に身長三尺ばかりの、太った五位の官人姿のものが現れたが、土中に埋められた銅の精であったという。同じ

く「鬼現油瓶形殺人語第十九」は、賢人右大臣とも呼ばれた藤原実資が、小さな油瓶がある屋敷の門のすき間から邸内に侵入するのを見たという。これらは不可視の精や鬼、『今昔』のいう「霊鬼」が、官人や器物の姿として現れたのである。

では小松氏のいう「中世的な妖怪」はどうだろうか。先述のとおり「付喪神」は、器物が精霊を得て変じるといふ。しかし『融通念仏縁起』に描かれる疫神は、別段器物が古びたものという解説はない。

其の夜の夢に、異形の者共、其の教村がりて行きけるが、此の家の門の内へ入らんとしけるを、主出向きて曰く、此は家内の男女、意を一つにして、別時念仏を始むべきにて、結番して、既に彼の番帳を仏前に置けり。乱入することなしかれと言ふ。

爰に役神滞りて云々、汝が云ふ事、実に然なり。¹⁹

とあり、『土蜘蛛草紙』にしても本文で

つゝ、みをうつがごとく足おとして、いひしらぬいるひいぎやうのものども、いくらといふかずをしらず、あゆみきたれり。はしらを中にへだて、をのくゝあぬ。すがたまちくゝなり。²⁰

と「すがたまちまち」な「異類異形」とのみ記される。これを「器物の妖怪」と理解してしまうのは、むしろ付喪神からさかのぼった、誤った見方ではないだろうか。

私見では「付喪神」以前の図像は『今昔』説話にあったように霊

鬼がたまたま変化して器物の姿を現した姿であろう。すなわち「付喪神」成立以前の図像は「器物の妖怪」である付喪神と同一視すべきではなく、あくまで器物の姿をとった疫神、異形であり、動物の姿をした異形といりまじることに違和感はない。『付喪神記』以前の例を、安易に「付喪神」とまとめてしまつては、見えなくなるものがある。

付喪神に限らず、年経たものが怪異をなすという発想や、草木ばかりか調度品まで仏性をもち歌を楽しむといった発想は、すでに田中貴子氏らが説くとおり中世文芸の世界でひろく受容された考え方であった。付喪神という器物の妖怪は、こうした中世文芸の発想とすでに描かれた「器物の姿の異形」とが結びついたところに生まれたものだろう。言語遊戯から生まれた「付喪神」の名称が定着したのは、中世文芸に根ざした考えと、「器物の姿の異形」像と、三者の結びつきによるものだったのである。

小括 これからの妖怪名義考

以上、「妖怪」「牛鬼」「付喪神」という三つの言葉（表現）に即して、古典資料とその解釈をふまえて分析を行った。微々たるものだが、先にふれた、小松氏による妖怪の三領域（①現象、②存在、③造形）のうち、①現象をともなわなない存在について、文学的手法

から追いかけてきたものである。

ここまでの考察をふまえれば、三領域を具体的にすれば①内容、②名称、③造形・図像に相当する。①と②が遊離しうるところに、実態のない妖怪としての特性があり、どのようなことをした、何が起った、という内容を伴わない、②名称だけの「妖怪」が、あとから①内容を生み、③図像化・造形化される、といったことが起る。また、付喪神のように③図像からの再解釈が、①や②に影響する、ということもある。

こうした語彙をめぐる考察について、近代以降に普及した「妖怪」という語で総括することは難しいが、あえて過剰な説明を加えるなら「現在、妖怪の名として考えられている言葉をめぐる考察」として、今後も考えていきたい。

注

- ① 小松和彦「妖怪とは何か」『妖怪学の基礎知識』角川選書、二〇一一年
- ② 『新訂増補国史大系二 続日本紀』吉川弘文館、オンデマンド版二〇〇七年
- ③ 森正人「モノノケ・モノノサトシ・物怪・怪異——憑霊と怪異現象とにかかわる語誌——」『国語国文学研究』二七、一九九一年。のち『古代心性表現の研究』岩波書店、二〇一九年所収。
- ④ 京極夏彦「通俗的「妖怪」概念の成立に関する一考察」小松和彦編

- 『妖怪学大全』小学館、『妖怪の理、妖怪の檻』角川書店、など。
- ⑤ 香川雅信「妖怪の思想史」前掲『妖怪学の基礎知識』
- ⑥ 小松和彦「よみがえる草双紙の化物たち」アダム・カバット編『江戸化物草紙』小学館、一九九九年
- ⑦ 京極氏前掲書。土居氏の報告は「怪異の分節——『京羽二重織留』の『妖怪』をめぐる——」第二十回国際日本文化研究センター「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究」による。
- ⑧ 神戸説話研究会編『宝永版本 観音冥応集——本文と説話目録』和泉書院、二〇〇六年
- ⑨ 『新編日本古典文学全集』枕草子』小学館、一九九七年
- ⑩ 田中重太郎『日本古典評釈・全注釈草書 枕冊子全注釈』角川書店、一九七八年
- ⑪ 『北村季吟古註釈集成4 枕草子春曙抄』下、新興社、一九七七年
- ⑫ 金子元臣『枕草子評釈』明治書院、一九二七年、十五版
- ⑬ 田中重太郎前掲書
- ⑭ 『日本古典文学大系一九 枕草子』岩波書店、一九五八年
- ⑮ 『新潮日本古典集成』下、新潮社、一九七七年
- ⑯ 萩谷朴『枕草子解環』三、同朋舎出版、一九八二年
- ⑰ 石田穠二訳注『新版枕草子』角川文庫、一九八〇年
- ⑱ 渡辺実校注『新日本古典文学大系二五 枕草子』岩波書店、一九九一年
- ⑲ 中村幸彦校注『新編日本古典文学全集八一 東海道中膝栗毛』小学館、二〇〇三年第二版
- ⑳ 池上洵一校注『日本古典文学大系二四 今昔物語集』三、岩波書店、一九九三年
- ㉑ 稲垣泰一編『考訂今昔物語』新興社、一九九〇年
- ㉒ 香川雅信「牛鬼」小松和彦編『日本怪異妖怪大事典』東京堂出版、二〇一三年。では、「牛のような姿の怪物。：民間伝承のなかで語られる牛鬼は、淵や滝、海など水辺に出没することが多い」とまとめる。柳田國男『日本伝説名彙』日本放送協会、一九五〇年。にも「牛鬼淵」の項目があり、和歌山県、高知県の事例をあげる。
- ㉓ 長谷川端校注『新編日本古典文学全集五七 太平記』小学館、一九九八年
- ㉔ 田嶋一夫校注『依藤太物語』『新日本古典文学大系五五 室町物語集』下、岩波書店、一九九二年
- ㉕ 前掲、萩谷『解環』では「いりすみ」を驛と理解したうえで「驛・牛鬼・碓の三種は、「名恐ろしきもの」という本段の主題からはやや外れて、見た目の怖ろしさで共通している点、この一組が、地名・土木・天・地・人・植物と進んできた本段全体に対する反転屈折の締め括りをなしている。」とする。
- ㉖ 平安時代の地獄絵については、竹居明男「日本古代六道絵史論序説——その思想的背景の多様性——」『文化学年報』二七、一九七八年。加須屋誠「図様と位置づけ」往生要集絵の成立と展開『国宝六道絵』中央公論美術出版、二〇〇七年など。
- ㉗ 『日本歴史地名大系三一 鳥取県の地名』平凡社、一九九二年
- ㉘ 仁井田好古編『紀伊統風土記』第三卷、帝國地方行政会出版部、一九一〇年。国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧（二〇一九年十二月八日）
- ㉙ 村井古道著、喜多野徳俊訳『南都年中行事』綜芸舎、一九七九年
- ㉚ 朝倉治彦校注『東洋文庫三四六 東海道名所記』平凡社、一九七九年
- ㉛ 林道春「丙辰紀行」岸上質軒校注『統帝國文庫 紀行文集』博文館、一九〇九年

- ③② 『新訂増補国史大系三三 吾妻鏡』後編、オンデマンド版二〇〇七年
- ③③ 横山重ほか校注『古浄瑠璃正本集十』角川書店、一九八二年
- ③④ 前掲『古浄瑠璃正本集十』解題
- ③⑤ 『新編武蔵風土記稿』内務省地理局、一八八四年。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧(二〇一九年十二月六日)
- ③⑥ 水上勲『塵輪』《牛鬼》伝説考』『帝塚山大学人文科学部紀要』一八、二〇〇五年
- ③⑦ 関連する先行研究として、石田英一郎『新版河童駒引考——比較民俗学的研究——』岩波文庫、一九九四年。東京大学出版会版、一九六六年。大本敬久『牛鬼論——妖怪から祭礼の練物へ』『愛媛県歴史文化博物館研究機関』四、一九九四年。同『牛鬼の起源に関する序説』『四国民族』三六・三七、二〇〇四年七月
- ③⑧ 鷲尾順敬、小堀くま校注『つくも神』『国文東方仏教叢書文芸部上』東方書院、一九二五年
- ③⑨ 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』新曜社、一九九四年。ちくま学芸文庫版、一九九九年
- ④① 片桐洋一『伊勢物語の研究 資料編』明治書院、一九六九年
- ④② 片桐洋一「解題 十卷本伊勢物語註——冷泉家流——について」『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』一、八木書店、一九八八年
- ④③ 片桐洋一編『伊勢物語古注釈大成』一、笠間書院、二〇〇四年
- ④④ 荒木浩「ツクモガミの心とコトバ」『徒然草への途』勉誠出版、二〇一六年。初出は『モノの極北——ツクモ・心・コトバ』『アジア遊学』132
- ④⑤ 東アジアを結ぶモノ・場』勉誠出版、二〇一〇年
- ④⑥ 西山克『鉄輪の恋——あるいは生活雑器の歴史学』『関西学院史学』四六、二〇一九年
- ④⑦ 『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』七、八木書店、一九八九年
- ④⑧ 『続日本絵巻大成 土蜘蛛草子・天狗草子・大江山絵詞』中央公論社、一九八四年。なお『土蜘蛛草紙』は近時、十五世紀末で成立を引き下げる説がある。徳田和夫「お伽草子と説話」『説話文学研究』五四、二〇一九年
- ④⑨ 小松和彦『器物の妖怪 付喪神をめぐる』『図説百鬼夜行絵巻をよむ』初出は『月刊百科』一三七、平凡社、一九八二年。のち『憑霊信仰論』伝統と現代社、一九八二年。講談社学術文庫版、一九九四年所収
- ④⑩ 小松、前掲論文。
- ④⑪ 類例として、朝鮮李朝期の野談集『於于野譚』に「およそ、物の怪というのは人が死んで鬼になったというものではない。ただ者が古くなって神霊が入り込み、よく幻となって形を現し、いたずらをするのだ。：者が古びれば、神霊が入り込み、形状を具えるというのは、昆虫・草木・鳥獣・魚鼈の精霊など、よく気を生じて虚の形状を表すことが珍しくない」とあり、動物や草木が古くなると神霊が入り込み妖事をなすことがあるという。柳夢寅著、梅山秀幸訳『於于野譚』作品社、二〇〇六年
- ④⑫ 『続日本の絵巻二一 融通念仏縁起』中央公論社、一九九二年所収、クリーブランド美術館本。
- ④⑬ 『続日本の絵巻二六 土蜘蛛草紙』中央公論社、一九九三年
- ④⑭ 田中貴子前掲書。
- 追記
- なお、大國隆正(一七九三—一八七二)による『死後安心録』には「日本国にて附喪といふは、万物につきてあやしみをなすものの総名」とある。(『増補大國隆正全集』五、国書刊行会、二〇〇一年)伊勢古注からの受谷であろう。